

## P21

### トモメヒカリの生活史 塩基配列が明かすその概略

猿渡敏郎 国立大学法人 東京大学 海洋研究所

平川直人・茂木正人・大野淳 国立大学法人 東京海洋大学

正岡哲治 独立行政法人 水産総合研究センター 養殖研究所

張成年 独立行政法人 水産総合研究センター 中央水産研究所  
横須賀庁舎

近年、底曳網漁業の投棄魚が未利用水産資源として注目を集めている。特にアオメエソ属 (*Chlorophthalmus*) 魚類は、非常に美味しいこともあり、メヒカリという地方名兼商品名で全国的に注目されるようになった。福島県いわき市は、マルアオメエソ (*C. borealis*) を市の魚とし、地元水産業の振興に活用している。

アオメエソ属魚類は極域を除く全海洋の大陸棚縁辺部から斜面に棲息する小型底魚類である。世界から 19 種が報告されているが、その分類、生態、生活史は未だ不明な部分が多い。昨年の本学会において、16SrDNA 塩基配列分析により、2001 年 5 月に薩南・東シナ海南部において採集された本属魚類仔稚魚がアオメエソ (*C. albatrossis*) であると報告された (Saruwatari et al, 2005)。アオメエソは、黒潮を用いて未知の産卵場から日本列島太平洋岸へと仔稚魚を輸送・分散させる、大回遊を行う小型底魚であると推察された。現在本種の全生活史解明に向けて研究中である。

2004 年 11 月に、台湾北東方海域で行なわれた俊鷹丸調査航海 (独立行政法人水産総合研究センター遠洋水産研究所) においてアオメエソ属仔稚魚が採集された。これらアオメエソ属仔稚魚 6 個体の 16SrDNA 塩基配列と、Saruwatari et al, (2005) の結果とを比較したところ、アオメエソが 3 個体、トモメヒカリが 1 個体、不明 2 個体であった。これは、トモメヒカリ仔稚魚の最初の採集報告事例である。トモメヒカリは標準体長 200~300mm に達する大型のアオメエソ属魚類である。

東京海洋大学所属練習船海鷹丸がインドネシア沖において採集したトモメヒカリ成魚を解剖したところ、両性生殖腺の発達が進んだ個体が多数確認された。アオメエソ属魚類では、未だ成熟個体の採集報告例がない。本種がインドネシア周辺海域において成熟・産卵していることを示唆する貴重な生態情報である。現在生殖腺の組織学的観察など、繁殖生態に関する基礎的研究を実施中である (平川 他 投稿準備中)。

得られた新知見を統合すると、トモメヒカリ仔稚魚もアオメエソ同様、日本列島の南西に位置する産卵場から黒潮により日本列島周辺へと輸送され、着底、成長することが示唆された。本種もウナギ同様の回遊を行なう底魚である。